

幼児の運動能力に影響を及ぼす要因について

～子どもと保護者の運動に対する行動と意識に着目して～

The Factors which have Influences on the Motor Ability of Children

- Especially on behavior and consciousness of sports of children and parent -

中尾 健一郎

I はじめに

筆者は「幼児の豊かな運動生活づくりに向けて環境整備に関する予備的研究」(中尾, 2015)において「豊かな運動生活づくりに向けた園と家庭の連携」の枠組みを提示した。本研究ではその中で家庭における影響要因について着目した。園では日々子どもたちの健やかな成長を促すために環境を整え、実践しているが、現代においては家庭での環境づくりも同様に重要視されている。今回は特に子どもと保護者の運動に対する行動と意識が子どもの運動能力にどのような影響を与えているか明らかにし、園と家庭とが連携して健康で豊かな生活づくりのために運動という視点から取り組む方法について検討してみる。

II 方法

前回の研究と同様に次の2つの調査を実施した。ひとつは子どもの運動能力の現状を把握するための運動能力検査、もうひとつは子どもと保護者を対象とした運動生活調査である。運動能力検査は27年5月と28年5月の2回、1年間の期間を開けて実施し、その間の28年1月に運動生活調査を行っている。1回目の運動能力検査の結果を受けて、保護者の意識や行動が子どもの運動能力にどのような影響を与えているか調査した。また、運動能力検査の結果については「元気アップカード」を作成し、子どもと保護者に通知している。2つの調査の詳細については以下のとおりである。

1) 運動能力検査

- ・実施日：1回目 平成27年5月／2回目 平成28年5月
- ・対象：佐世保市内A認定こども園 27年度年中児 46名／28年度年長児 46名
- ・調査項目：MKS幼児運動能力検査 3種目(50m走・立ち幅跳び・テニスボール投げ)

2) 運動生活調査

- ・実施日：平成28年1月
- ・対象：佐世保市A認定こども園 27年度年中児の保護者 46名
- ・回収率：78.3% (36名回収)

III 結果の概要

1. 運動能力検査の結果(2年間の推移)について

1) 25m走

図1は25m走の評定点分布の推移を示している。27年度は2点以下が56.4%と多かったのが、28年度は3点、4点が60.8%と増加している。5点は15.4%から4.3%に減少しているものの、能力が全体的に向上している。

2) 立ち幅跳び

図2は立ち幅跳びの評定点分布の推移を示している。27年度2点以下が70.2%であったのが、28年度は58.7%、そして、3点は16.2%から34.8%と増えており、4点は13.5%から6.5%と減少している。全体的に低得点群が3点に推移しており、若干の能力の向上がみられる。

3) テニスボール投げ

図3はテニスボール投げの評定点分布の推移を示している。27年度は2点以下が75.7%であったのが、28年度は36.9%に減少し、3点が18.9%から47.8%へ、4点が2.7%から13.0%へと推移している。大幅に低得点群が中高得点群に推移している。

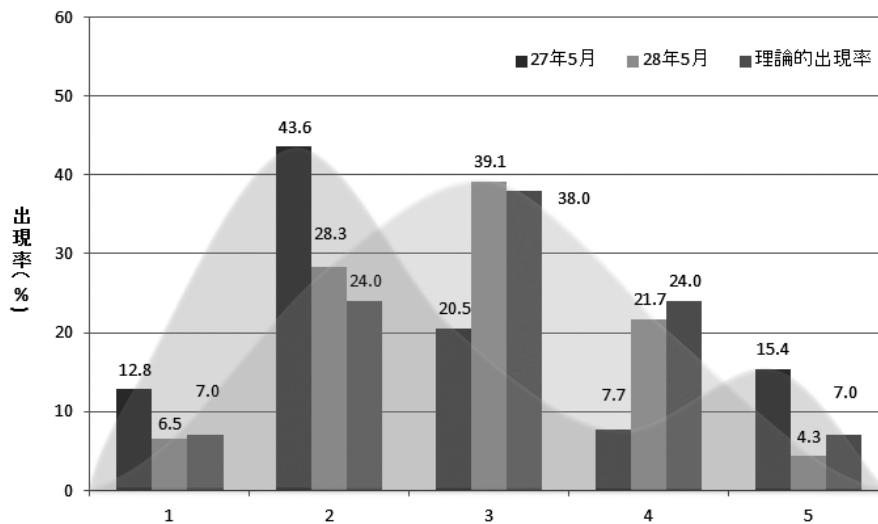


図1 25m走 評定点の推移

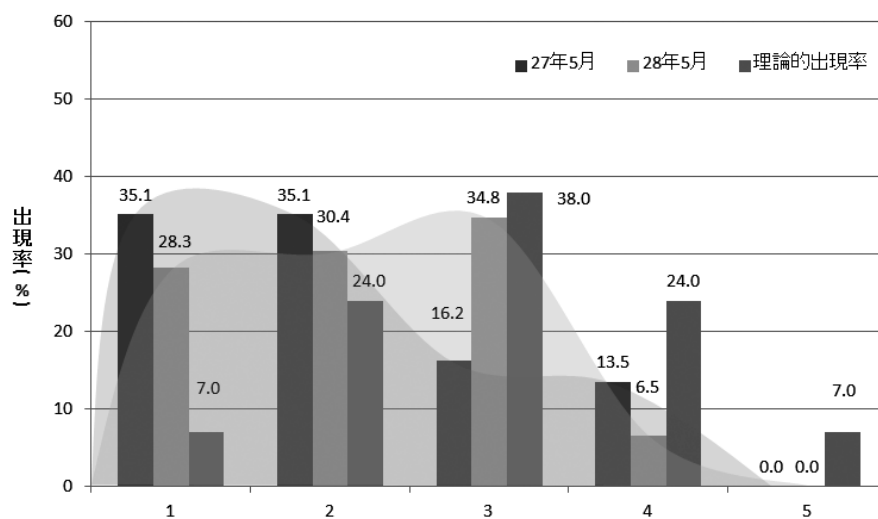


図2 立ち幅跳び 評定点の推移

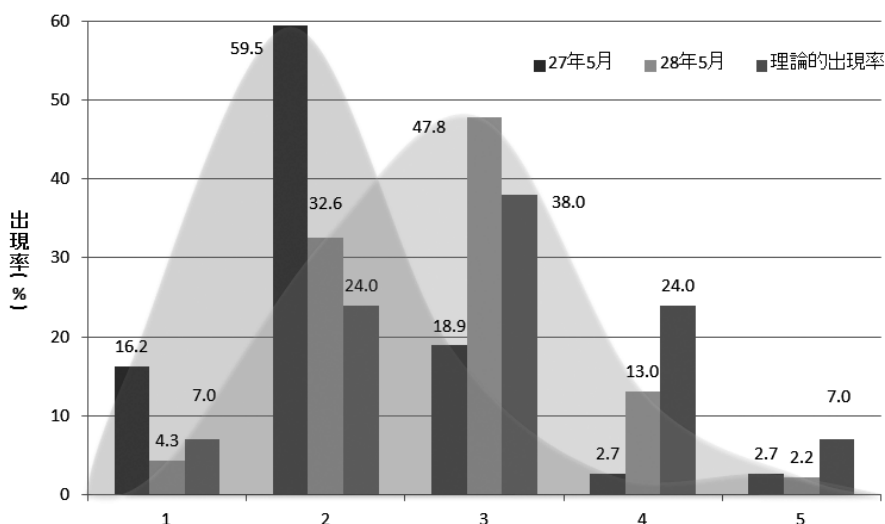


図3 テニスボール投げ 評定点の推移

4) 3種目合計評定点の推移

図4は3種目合計評定点分布の推移を示している。それぞれの種目で見ると、25m走がもっとも順調に能力が向上している傾向にあり、次にテニスボール投げが続き、立ち幅跳びは他の2種目に比べると低得点群が多いなど特徴がみられる。しかし、27年度は2点以下が67.2%と6割以上であったのが、43.4%に減少し、3点以上4点以下が26.6%から54.4%に増加するなど低得点群が中高位群に推移しており、高位群の人数は少ないが、得点分布も理論的出現率に近づいている。また図5は3種目の評定点合計の平均値を比較したものであるが、28年度が0.74ポイント高く、統計的にも有意な差がみられ、全体的には運動能力が向上しているといえる。

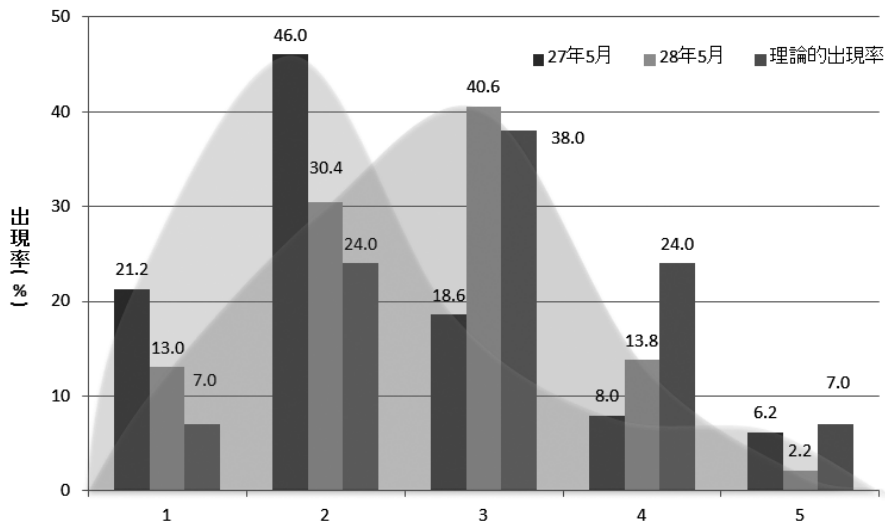


図4 3種目合計評定点の推移

	平均値	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率
評定値27(3種目合計)	7.16	31	2.410	-2.158	30	0.039
評定値28(3種目合計)	7.90	31	1.989			

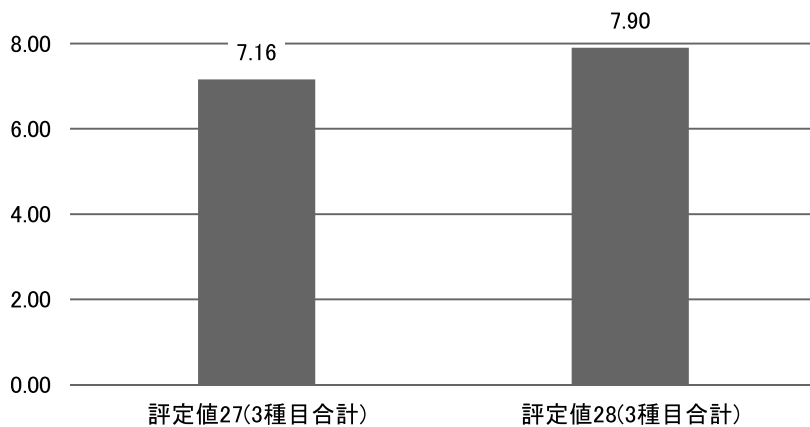


図5 評定値(3種目合計)の比較

2. 運動生活調査の結果について

1) 家庭における子どもの実態について

表1から表4は子どもが1年間に1番よく行った運動・スポーツ・運動遊びの実態を示している。8割以上の子どもたちが何らかの活動をしており、種目では「水泳(スイミング)」をよく行っているようである。活動頻度は週単位が半数以上を占め、家族やクラブ・サークルの仲間と一緒に活動している様子が窺える。

表1 活動の有無

項目	度数	パーセント
運動・スポーツ・運動遊びのいずれかをしていた	29	80.6
特にしなかった	6	16.7
無回答	1	2.8
合計	36	100.0

表2 もっとも行った種目

最も行った種目	度数	パーセント
サッカー	1	2.8
なわとび	1	2.8
かけっこ	4	11.1
水泳(スイミング)	9	25.0
ダンス	2	5.6
体操(ストレッチ・リズム体操など)	2	5.6
おにごっこ	3	8.3
かくれんぼ	1	2.8
自転車遊び	1	2.8
すべりだい	4	11.1
その他	2	5.6
無回答	6	16.7
合計	36	100.0

表3 活動単位

最も行った種目の活動単位	度数	パーセント
年単位の活動	1	2.8
月単位の活動	4	11.1
週単位の活動	20	55.6
無回答	11	30.6
合計	36	100.0

表4 活動相手

活動相手	度数	パーセント
ひとりで	1	2.8
家族と	8	22.2
友だちと	5	13.9
クラブ・サークルの仲間と	9	25.0
その他	1	2.8
無回答	12	33.3
合計	36	100.0

2) 子どもの運動やスポーツ・運動遊びに対する意識

表5は子どもの運動・スポーツ・運動遊びに対する意識を示している。「好き」が55.6%、「どちらかという好き」が44.4%と合わせると全員が好印象をもっている。また表6は活動の現状に対する認識を示しているが、「あまりしていないので、もっとしたい」という子どもたちが61.1%と最も多く、現状に満足していないようである。また「いっぱいしているけど、もっとしたい」25.0%と含めると86.1%と全体的に活動欲求が強い傾向がみられる。

表5 運動・スポーツ・運動遊びへの意識

項目	度数	パーセント
好き	20	55.6
どちらかという好き	16	44.4
どちらかというきらい	0	0.0
きらい	0	0.0
合計	36	100.0

表6 運動・スポーツ・運動遊びへの欲求

項目	度数	パーセント
いっぱいしているけど、もっとしたい	9	25.0
いっぱいしているので、今のままでいい	1	2.8
いっぱいしているので、今よりへらしたい	0	0.0
あまりしていないので、もっとしたい	22	61.1
あまりしていないけど、今のままでいい	3	8.3
あまりしていないけど、今よりもへらしたい	0	0.0
無回答	1	2.8
合計	36	100.0

3) 保護者の運動・スポーツ・運動遊びに対する意識と現状

表7は保護者自身が運動・スポーツで体を動かすことについてどのように考えているか示している。「好き」「どちらかという好き」を含めると7割近くにはなるが、27.8%が「どちらかというきらい」という保護者も存在している。

表8は保護者のこれまでの運動経験について質問した結果である。小学から中学にかけては約8割が何らかの場所や機会に運動やスポーツをしていたようであるが、高校以降は機会が減少しており、現在では7割の保護者が運動・スポーツを

表7 保護者の運動・スポーツに対する意識

項目	度数	パーセント
1 好き	14	38.9
2 どちらかという好き	11	30.6
3 どちらかというきらい	10	27.8
4 きらい	0	0.0
無効	1	2.8
合計	36	100.0

表8 保護者の運動経験

(上段:度数 下段:%)	運動・スポーツをしていた(している)				特に運動・スポーツをしていなかった(いない)
	学校の運動部活動に所属して活動	地域や民間のスポーツクラブに所属して活動	いずれにも加入せずに活動	小計	
a 小学生時代	14 40.0	12 34.3	2 5.7	28 80.0	7 20.0
b 中学生時代	27 77.1	3 8.6	0 0.0	30 85.7	5 14.3
c 15-17歳ごろ・高校時代	14 40	0 0.0	4 11.4	18 51.4	17 48.6
d 18-22歳ごろ	5 14.7	5 14.7	5 14.7	15 44.1	19 55.9
e 現在	0 0.0	5 14.3	5 14.3	10 28.6	25 71.4

していない様子が窺える。

表9は子どもと運動・スポーツ・運動遊びを一緒にしているか質問した結果である。「よくしている」と回答したのはわずか8.3%で、66.7%は「時々している」と回答しているものの、「ほとんどしていない」が19.4%おり、日常的に子どもたちと一緒に体を動かす機会が少ない様子が窺える。また一緒にする相手としては両親、父親、母親とほぼ同じ割合を示している。

表9 子どもとの運動について

項目	度数	パーセント
よくしている	3	8.3
時々している	24	66.7
ほとんどしていない	7	19.4
まったくしていない	0	0.0
無回答	2	5.6
合計	36	100.0

ア 一緒にする相手

項目	度数	パーセント
主に父親	8	29.6
主に母親	9	33.3
父親と母親の両方	9	33.3
その他	0	0.0
無効	1	3.7
合計	27	100.0

4) 元気アップカードに対する保護者の意識について

2回の運動能力検査の後、「元気アップカード」を作成し、調査の結果について子どもたちを通して保護者に伝えた。子どもたちには本学保育学科保育専攻2年生の中尾ゼミの学生が説明をしながら子どもたちの現状を伝えている。またカードの裏面にはワンポイント的なアドバイスを保護者向けに記載し配布している。表10はその結果を見た保護者の意識について尋ねた結果である。この結果は1回目の検査後のアンケート調査であったため、1回目のカードに限定した結果である。全体の83.3% (30名) が結果を見ており、見ていないのは13.9% (5名) であった(無回答1名)。調査結果を見て7割の保護者が子どもの現状を知り、4割から5割がきっかけづくりや機会づくり、外遊びをさせようと思うようになった様子が窺える。「ややそう思う」まで含めると8割以上が同様に考えており、検査結果を通知したことが保護者の意識にも少なからず影響を与えているものと推察できる。

表10 元気アップカードに対する意識

	上段:度数 下段:パーセント		そう思う	やや思う	あまり 思わない	全く 思わない	合計
1 子どもの運動能力の現状を知ることができた	21 70.0	9 30.0	0 0.0	0 0.0	30 100.0		
2 子どもが運動をするきっかけづくりになると思った	13 43.3	11 36.7	6 20.0	0 0.0	30 100.0		
3 子どもと一緒に運動をする機会を作ろうと思った	13 43.3	13 43.3	4 13.3	0 0.0	30 100.0		
4 もっと子どもに外遊びをさせようと思った	15 50.0	13 43.3	2 6.7	0 0.0	30 100.0		

めると8割以上が同様に考えており、検査結果を通知したことが保護者の意識にも少なからず影響を与えているものと推察できる。

5) 運動会の様子を見た保護者の意識

表11 運動会の様子を見た保護者の意識

項目	非常に感じた	
	度数	パーセント
1 子どもの成長を実感した	30	83.3
5 いつもとは違う一面をみる事ができた	20	55.6
12 もっと子どもと遊んだり運動したりしようと思った	20	55.6
2 動きが良くなった	19	52.8
11 もっと体を動かす機会をつくってあげようと思った	18	50.0
4 お友達と協力できていた	15	41.7
9 お友だちを励ましたり、応援したりできていた	15	41.7
3 自分の力を出し切っていた	14	38.9
13 自分ももっと運動をしようと思った	13	36.1
6 体をうまくコントロールできていた	11	30.6
8 子どもの得意不得意がわかった	11	30.6
7 他のお友だちとの成長の違いが分かった	10	27.8
10 お友だちへアドバイスができていた	5	13.9

運動会は様々な種目を通して保護者も参加しながら、また他の子どもたちとも比較しながら自分の子どもの様子を知る機会となる行事であるが、表11は運動会で子どもの様子を見た保護者の意識を尋ねた結果である。4段階尺度のうち「非常に感じた」と回答した数だけを見ると、8割以上が「子どもの成長を感じた」と感じており、半数以上が「いつもとは違う一面をみた」「動きが良くなった」と感じている。また「もっと子どもと遊んだり運動しようと思った」「もっと体を動かす機会を作ってあげようと思った」なども半数以上が答えており、子どもと運動をする機会について振り返っている様子も窺える。

6) 保護者の運動・スポーツ・運動遊びに対する意識

表12は保護者の運動・スポーツ・運動遊びについてどのように考えているか尋ねた結果である。「親子で一緒に体を動かす」ことや「動かす機会を増やすために、親子で行う」ことに対して約7割が「そう思う」と回答しており、園にまかせっきりであったり、専門の指導者を頼ったりすることよりもまず、自分たちで対処しようと考えている様子が窺える。

表12 保護者の運動・スポーツ・運動遊びに対する意識

項目	そう思う	
	度数	パーセント
1 親子で一緒に体を動かすことは大切だと思う	28	77.8
2 子どもの体を動かす機会を増やすために、親子で行うのは良いと思う	25	69.4
5 運動や遊びだけでなく、生活習慣の中でも体を動かす機会をつくりたいと思う	14	38.9
7 園で体を動かす機会をもっとつくってほしいと思う	12	33.3
3 運動やスポーツ、運動遊びは専門の指導者に習う方が良いと思う	6	16.7
6 子どもと遊ぶのは疲れるので、あまり一緒にやりたくはない	1	2.8
4 運動をしなくても特に困ることはないので、意識してやる必要はない	0	0.0

IV 結果の考察

1) 子ども及び保護者の運動に対する行動と運動能力との関係について

①子どもの運動に対する行動と運動能力について

表13 子どもの活動の有無と運動能力

	項目	N	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
評定点27	している	26	7.19	2.530	-1.056	28	0.300
	していない	4	6.25	0.957			
評定点28	している	26	7.65	1.979	0.728	28	0.473
	していない	4	8.75	1.500			

表14 子どもの活動頻度と運動能力

	項目	N	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
評定点27	月単位の活動	4	6.50	1.000	-0.602	19	0.554
	週単位の活動	17	7.41	2.938			
評定点28	月単位の活動	4	6.75	1.258	-0.840	19	0.411
	週単位の活動	17	7.76	2.306			

表13は子どもの運動・スポーツ・運動遊びの活動の有無と運動能力との関係について示している。1回目は「活動をしている」子どもたちの評定点が高く、2回目は「していない」子どもたちの評定点が高くなっているが、統計的には有意な差がみられなかった。また表14は活動頻

幼児の運動能力に影響を及ぼす要因について ～子どもと保護者の運動に対する行動と意識に着目して～

度と運動能力との関係をして示している。1回目、2回目ともに「週単位の活動」をしている子どもたちの評定点が高くなっているが、こちらも有意な差はみられなかった。

②大人の運動に対する行動と子どもの運動能力の関係

表15 保護者の運動行動と子どもの運動能力

	項目	N	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
評定点27	している	8	7.63	2.925	0.568	28	0.574
	していない	22	7.05	2.299			
評定点28	している	8	8.25	2.605	0.687	28	0.498
	していない	22	7.68	1.756			

表15は保護者の運動に対する行動と子どもの運動能力の関係について示している。現在「運動をしている」保護者と「していない」保護者では「している」保護者の方の子どもの運動能力が高くなっているが、有意な差はみられなかった。

2) 子ども及び保護者の運動に対する意識と運動能力の関係について

①子どもの運動の好き嫌いとの運動能力の関係

表16 運動の好き嫌いとの運動能力

	項目	N	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率
評定点27	好き	17	8.00	2.598	2.280	29	0.030
	どちらかという好き	14	6.14	1.748			
評定点28	好き	17	8.41	2.063	1.610	29	0.118
	どちらかという好き	14	7.29	1.773			

表16は子どもの運動の好き嫌いとの運動能力の関係について示している。27、28年度のどちらとも「好き」と答えている子どもの運動能力が高くなっており、27年度は有意な差が見られた。28年度は差がなかったが、「どちらかという好き」と答えた子どもたちの能力が高くなり、差がなくなってきていると考えられる。

②子どもの意欲と運動能力の関係

表17 子どもの運動意欲と運動能力

	項目	N	平均値	標準偏差	F値	自由度	有意確率
評定点27	いっぱいしているけど、もっとしたい	9	9.11	2.848	5.142	2	0.013
	あまりしていないので、もっとしたい	17	6.47	1.736			
	あまりしていないけど、今のままでいい	3	5.67	2.309			
評定点28	いっぱいしているけど、もっとしたい	9	9.11	2.028	3.755	2	0.037
	あまりしていないので、もっとしたい	17	7.53	1.807			
	あまりしていないけど、今のままでいい	3	6.00	1.732			

表17は子どもの運動意欲と運動能力の関係について示している。27、28年度とも有意な差が見られ、「もっとしたい」と思っている子どもたちが「今のままでいい」と思っている子どもたちよりも運動能力が高くなっている様子が窺える。また28年度は「いっぱいしているけど、もっとしたい」という子どもたちよりも「あまりしていないので、もっとしたい」と思っている子どもたちと、「あまりしていないけど、今のままでいい」と思っている子どもたちも運動能力が上がっており、意欲の低い子供たちの能力が向上している。

③保護者の運動・スポーツに対する意識と子どもの運動能力の関係

表18 保護者の運動・スポーツに対する意識と子どもの運動能力

	項目	N	平均値	標準偏差	F値	自由度	有意確率
評定点27	好き	11	8.00	2.933	1.035	2	0.369
	どちらかという好き	10	6.50	2.173			
	どちらかというときらい	9	7.00	2.000			
評定点28	好き	11	8.55	2.207	1.562	2	0.228
	どちらかという好き	10	7.80	1.989			
	どちらかというときらい	9	7.00	1.500			

表18は保護者の運動・スポーツに対する好き嫌いとは子どもの運動能力の関係について示している。27,28年度とも保護者が「好き」と回答した子どもの能力が「どちらかというときらい」と答えた子どもよりも平均値は高くなっているが、有意な差はみられなかった。

3) 考察のまとめ

運動能力検査と運動生活調査の結果を踏まえ、保護者と子どもの運動に対する行動と意識が運動能力にどのように影響を与えているか考察した。運動能力は27年度から28年度にかけて全体的に向上していたが、保護者の運動に対する行動や運動・スポーツに対する意識、子どもの運動に対する行動に関係なく、子どもの運動に対する好き嫌いや意欲が運動能力に影響を与えていることが今回の調査からは明らかとなった。

前回の調査(中尾,2015)では保護者へのフィードバックができなかったことが課題として挙げていたこともあり、今回は2回の運動能力検査の実施後、「元気アップカード」を作成し、調査の結果について子どもたちを通して保護者に伝えていた。表10の結果が示す通り、7割の保護者が子どもの現状を知り、きっかけづくりや機会づくり、外遊びをさせようと4割から5割が回答し、「ややそう思う」まで含めると8割以上になっていた。また、表12で保護者の運動・スポーツ・運動遊びについてどのように考えているか尋ねた結果が示したが、「親子で一緒に体を動かす」ことや「動かす機会を増やすために、親子で行う」ことに対して約7割が「そう思う」と回答しており、園にまかせっきりであったり、専門の指導者を頼ったりすることよりもまず、自分たちで対処しようと考えていた。このようなことから、結果を通知したことが、家庭での子どもの運動やスポーツ、運動遊びの環境について保護者に振り返りを促し、子どもがもっと遊びたい、もっと体を動かしたいと思う環境や機会づくりを意識して取り組むようになったことが背景にあるのではないかと推察される。当然、運動能力検査をしたことで、日常の保育の中で練習を行い、これまで以上に子どもたちに強い関心を喚起させたり、どうしたら効果的に体を動かすことができるか知識や能力を高めようとする態度を生起させたりするなど、次の検査まで維持・向上させようと園側も意識して環境を改善したという影響の大きさを排除できないが、子どもたちの中にも「もっと早く、高く、遠くへ」という意識が芽生え、そのための環境が園と家庭で整いつつある結果ではないかと考えられる。

子どもの運動指導について杉原(2010)が運動能力を効果的に高める有効な方法として遊びの中で運動することによって高い運動意欲を持った子どもを育てる重要性を指摘しているように、運動の量も必要であるが、子どもが体を動かしたいと意欲をもつ環境をいかに構成できるかということがより重要であることが改めて明らかとなった。そして今回は、そのために家庭と情報共有を深めていく必要性を示唆する結果となった。

V 結語

筆者が提示した「豊かな運動生活づくりに向けた園と家庭の連携」(中尾,2015)の枠組みに沿って、今回は運動能力検査の実施、子どもと家庭への「元気アップカード」を使った結果の通知、そして運動生活調査の実施を行い、運動能力との関連について考察してきた。結果、保護者の運動に対する行動や意識、子どもの運動に対する行動に関係なく、子どもの運動に対する好き嫌いや意欲が運動能力の向上に影響を与えていることが明らかとなった。保護者自身の運動やスポーツに対する態度や意識が子どもの運動能力に影響を与えていなかったことは、例えば、体を動かすこと、運動やスポーツが嫌いで、実際に現在していなくても、子どもが運動をしたいと意欲をもつ環境を整えることができれば、また子どもの運動頻度に関係なく「もっとしたい」という環境を作り出すことができれば能力の向上が見込めるということである。運動能力の向上について当然園でも実践しているが、同様に家庭と連携して取り組むことでさらに効率的に行うことができる。子どもと一緒に体を動かすことやそのための機会づくりの必要性を認識している保護者が多いことを考えると、家庭での人的環境としての保護者自身が、子どもの運動意欲をどのようにしたら高めることができるかということに対して関心を持ち、実践してもらう必要がある。今後は家庭に向けても、そのような情報を含んだ内容を発信する方法についても検討する必要があると考えている。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、調査を快く受けていただきました幼稚園の皆様、保護者の皆様、特に担任の先生方には貴重な時間を割いて協力していただきました。感謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞に代えさせていただきます。

【付記】

本研究は長崎短期大学平成 27 年度傾斜配分研究費より助成を受けていることを付け加えておく。

<引用・参考文献>

宇土正彦（1986）体育経営の理論と方法．大修館書店．

杉原 隆（2010） 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係．体育の科学,61（6）,341-347

杉原 隆・河邊貴子（編著）（2014） 幼児期における運動発達と運動遊びの指導．ミネルヴァ書房．

中尾健一郎（2015） 幼児の豊かな運動生活づくりに向けた環境整備に関する予備的研究．長崎短期大学研究紀要第 27 号 .pp11-22